

『最初の交響曲と最後の交響曲～どこからきてどこへ行ったか？』

：カミーユ・サン＝サーンス』

伊藤美由紀（2400文字）

ベルリオーズ以後ドビュッシー以前の時代の重要なフランスの作曲家の一人であるカミーユ・サン＝サーンスは、19世紀後半のフランス音楽の最初の重要な交響曲作曲家でもあり、古典的なフランス精神を貫いた作曲家とも言える。3歳から作曲を始め86歳までの人生、几帳面な性格で仕事を規則正しく毎日こなし、作曲の筆も早いと言われており、あらゆるジャンルによる300曲を超える作品を残した多作の作曲家である。また、作曲のみならず、ピアニスト、オルガニストとしても一流の腕前をもちプロとして活動し、音楽批評家、編集者としてもたくさんの著作物を残し、音楽のみならず、詩、戯曲までも残している。彼の関心は、天文学、数学、哲学、考古学、民俗学などにも及び、各々において論文を残すほどの多彩な才能をもった雄弁な芸術家でもあった。管弦楽作品としては、協奏曲、交響詩、序曲、組曲など、50曲を超える作品が残されているなか、交響曲は5曲残されており、出版されているものは3曲である。彼の作品のなかで重要な意味をもつ《交響曲第1番》から最後の《第3番》にいたるまでの彼の考え方、作品の変遷を、当時のフランスの歴史的文化背景を考慮しながらまとめてみる。

当時のフランスの音楽状況は保守的であり、作曲家はオペラで成功することが第1と考えられており、器楽の作曲家はほとんど見向きもされなかった。交響曲はローマ大賞志願者が行う単なる手慰みの練習としか見られておらず、室内楽に対しても敵対的であった。そんな状況下、交響曲と室内楽を受け入れた最初のフランス人作曲家がサン＝サーンスである。当時の政治的な関係からドイツ主義は非難をあび、ドイツ人作曲家の作品は拒絶された時代、若くからピアニストとして、まだパリでは知られていなかったベートーヴェン、モーツァルト、シューマン、ワーグナーなどの作品を積極的に演奏した。また、ドイツ人作曲家から大きな影響を受けていた彼自身の作品は、保守的なパリの聴衆から未来の音楽と批判され続けた。

ローマ大賞に2回破れた後、最初に出版された交響曲で、サン＝サーンスの作曲家としてのキャリアを築くきっかけとしても重要な作品が、《交響曲第1番》である。ベルリオーズ、グノーにも絶賛され、上品な旋律線、構成美、多

彩な音色を華麗に扱う管弦楽法において、18歳の成熟ぶりが見られる。尊敬するバッハ、ハイドン、モーツァルト、そして、動機の展開方法、有機的な構成におけるベートーヴェンの精神、シューマン、メンデルスゾーン、ベルリオーズ、グノーの影響も伺える。第3交響曲で特に重要であるリストの交響詩から学んだ変容するテーマの扱い方も、既にこの第1番で試されている。続く第2番は、番号の与えられていないものを含むと5曲中4番目の25歳のときの作品である。前作までの管弦楽法、循環形式においても更なる進歩がみられる。

そして51歳、円熟期の作品であり、近代フランス交響曲の傑作のひとつである彼の最後の交響曲、《第3番》は、前作までの交響曲に比べ格段の差がある。ロンドン・フィルハーモニー協会による委嘱作品であり、自身の指揮によりロンドンで初演された。3管編成に2名のピアニスト、オルガンを含んだ大規模な編成であり、はじめてオルガンが交響曲に使用されたことから、別名「オルガン交響曲」とも呼ばれる。自身がピアニスト、オルガニストであり楽器に精通していたこともある。特にマドレーヌ教会でオルガニストとして20年以上務めた経験が生かされている。「偉大な楽器の可能性を利用するためには、その楽器を徹底的に知らなければならない」と本人も語る。2楽章構成であるが、伝統的な4楽章に基づき、各々の楽章は2つの部分から成り、構成にも工夫がされている。1楽章終わりに、オルガンは静かに瞑想的かつ荘厳な旋律で演奏され、弦楽器と美しく溶け合い神秘的な瞬間を沸き立たせる。2楽章ではピアノによる華やかな分散和音、盛り上がる打楽器とともにクライマックスにむけて、圧倒的な迫力と音響でオルガンの存在感を表現する。形式の上では、ベルリオーズの《幻想交響曲》、リストの交響詩で応用されている循環形式で書かれており、楽章を通して展開されるグレゴリオ聖歌の《怒りの日》の冒頭を引用したモチーフを循環主題として駆使している。シューベルトも《未成交響曲》の第1楽章で象徴的にこのテーマを引用しており、その手法を発展させたと思われる。サン=サーンスは、リストと深い友情関係があり、彼の『交響詩』をフランスにもたらした。リストも彼の作品をドイツで広め、彼のことを「最も世界で素晴らしいオルガニストである」と讃辞を贈っている。この作品の表紙に「リストの思い出として」と記載されており、初演直後に亡くなったリストに捧げられていることから彼への敬慕の深さが伺える。「この作品において、私の与える事のできたもの全てを提示した。」と作曲家本人が語っているように、自身でも達成感を感じ満足した作品に仕上がっていると自負している。「芸術は、

形式が美しくなければ意味がない」と宣言しており、古典的な整った曲の構成に徹底的にこだわり続けた賜物である。

古典的な精神を生涯貫き、晩年には時代遅れとして、ドビュッシーからも伝統主義者として批判されたものの、86歳までの生涯を音楽に捧げ、18世紀と19世紀を繋ぐ架け橋となった。30代には、フランクとともにフランスにおける純音楽復興をめざして国民音楽協会を設立し、同時代のフランス音楽だけを発表する演奏会を立ち上げ、交響的作品、室内楽を普及した。若い作曲家に作品上演の機会を与え、希望と刺激を与える活動の場となり、自身の3曲の交響曲をはじめ器楽作品もそこで発表し、フォーレ、ドビュッシー、ラヴェル、ダンディほか、フランス近代の作曲家たちの将来に大きく影響した。逆境に負けず国際的な視点で音楽をとらえ、フランス音楽史に残した彼の積み重ねた偉業があったからこそ、その後のフランスの作曲家たちの自立を促しフランス音楽の国際的发展へと繋がったのである。